様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｈ０６６９５

研究課題名（和文）アンドレ・ブルトンの詩学

研究課題名（英文）Andre Breton's poetics

研究代表者
前之園　望（MAENOSONO, Nozomu）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・助教

研究者番号：２０７８４３７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：アンドレ・ブルトンの詩法は当初は「自動記述」による散文詩作品が中心であり、詩的言説は単線的に生成されていたが、1920年代半ばから次第に自由詩作品の比重が大きくなり、改行された詩句ごとに語り直しの可能性が導入され、作品内に複数の始点を含み持つ開かれた詩法へと変化した。30年代にはオートマティスムの新たな探究が行われる一方で、詩的言語を通過させることで物質の持つ潜在的現実を出現させるポエム=オブジェの詩学も追究され、40年代以降の詩的言語を通過させることで現実世界を変容させる実践への道が開かれた。

研究成果の概要（英文）：At the beginning of his career as a poet, Andre Breton composed prose poems by applying the famous automatic writing. The movement of writing therefore follows a linear genesis. However, in the 1920s, the poet gradually gives importance to the form of free verse. Thanks to this form, each verse has the chance to reorient the course of the poem. Thus, poetic writing in Breton becomes much more flexible by containing several possible starting points of the speech in a single poem. In the 1930s, on the one hand, Breton enlarged the range of the idea of automatism, and on the other hand, he groped the possibility of the poem-object which actualizes a latent reality hidden in small everyday objects. The poetics of the poem-object is based on a poetic description that goes beyond the old dualism of perception and representation. In the 1940s, Breton used this poetics to renew the real world.

研究分野：近代フランス文学

キーワード：アンドレ・ブルトン　シュルレアリスム　フランス文学　フランス近代詩

１．研究開始当初の背景

アンドレ・ブルトンはシュルレアリスム運動の中心人物であり、この運動は 20 世紀に文学・芸術運動として、フランスを中心に世界規模で展開された。シュルレアリスム研究は 2000 年頃から参照できる資料の数が大幅に増加し、図版資料の充実にともなって、研究者たちの関心は造形芸術のジャンルに集中してきている。特に近年は、美術史や現代思想を経由してシュルレアリスムにおける造形的イメージに考察を加えることが多いが、最終的に問われるのは常に、言語とイメージの間に成立する関係性である。応募者の研究も独自の観点からこの流れに掉さすものである。

シュルレアリスム運動は、ブルトンの提唱する「自動記述」に端を発する。この曖昧な用語のために、自動記述の実践は長らく「無意識のほとばしり」に不用意に還元されていた。この欠点を補ったのが、パリ第四大学教授のミシェル・ミュラらの編集による論文集『夢の砂の中には風を掬うシャベルが』（1992、以下『夢の砂』と表記）である。この論集では、自動記述の試みが、理知的かつ二次的な「作業」として再定義され、「原理」、「実践」、「作品」という三軸から再検討されている。自動記述における受容の極（読者）の重要性を明らかにした画期的な研究であるが、本研究の本質的な問題は、自動記述の根幹にある「オートマティスム」の概念を、安定した一枚岩のように扱っている点である。というのも、オートマティスムという概念自体が、常にブルトンによって再定義される流動的なものだからである。したがって、この研究の読解モデルをシュルレアリスムの詩作品の解釈に適用できるのは、30 年代前半までが限界である。

一方、『夢の砂』の欠点を部分的に補ったのが、ブルトンの詩の専門家であるクロード・ボメルツの『アンドレ・ブルトンのオートマティックな歌と高きことばの伝統』（2004）である。この研究は、30 年代後半以降も含めたブルトンの詩的言語活動の総体を、「崇高の詩学」という観点から新たに総括することに成功した貴重なものである。ただしこの研究も、クロノロジックな観点や、ブルトンの提示する諸概念の扱いにおいて、網羅性および説得性を欠いており、各時期のブルトンの詩法の変遷はいまだに明らかにされていない。

こうした状況を踏まえて、本研究代表者（以下「代表者」）はこれまで、アンドレ・ブルトンの詩学を理論と実践の両側面から研究してきた。とりわけ、ブルトンの詩作品から彼の思想の本質を抽出することを目指し、そのための新しい読解モデルを探究してきた。代表者がフランス国立リュミエール・リヨン第二大学に 2016 年に提出した博士号請求論文« André Breton et les Grands Transparents：La genèse d’un mythe »（「アンドレ・ブルトンと透明な巨人―生成する神話」）には、その研究の成果の一部が反映されている。この論文において、ブルトンの「オートマティスム」観が 30 年代に変成する軌跡を跡付けることに成功し、さらに 40 年代には、ブルトンがある特殊な「神話」（彼が「透明な巨人の神話」と呼ぶもの）を理論的言説内ではなく複数の詩的言説を通して密かに練り上げていく過程を明らかにした。これはつまり、ブルトンの理論的言説のみを参照していても、解明することのできない領域が存在するということであり、ブルトンの詩作品が文学研究の重要な対象となり得ることを証明したと言えるだろう。

２．研究の目的

本研究の目的は、ブルトンの詩法の変遷を時系列に沿って明らかにし、彼の詩学の全容を解明することである。ブルトン研究においてこの試みは前例のない画期的なものと言える。なぜなら、ブルトンの詩作品はその重要性にも関わらず、これまで本格的な研究対象とはなってこなかったからである。その原因はおそらく、ブルトンが『シュルレアリスム宣言』（1924、以下『宣言』）で自動記述を提唱したことにある。ブルトンの説明を素直に受け取れば、書く内容を予め定めずに、言わば適当にペンを走らせることで豊かな詩的イメージを備えた文章ができあがるというのが自動記述である。なぜそんな魔法のような記述法が可能なのか。先行研究は自動記述の《理論》を明らかにしようとはするが、自動記述で書かれた文章の内容にはほとんど触れようとしない。推敲なしに適当に書いたものには作者の意図も反映されておらず読む価値がないと判断されているのだろう。しかし、忘れてはならないことは、まず《実践》されていた記述法を、ブルトンが事後に「自動記述」と名付けたという事実である。本来考察すべき問題は「なぜその記述法をブルトンが自動記述と名付けたか」であって、「自動記述とはなにか」ではないのである。

本研究は、常に《実践》を、つまりブルトンによって制作された詩的作品を出発点として分析を行う。そうすることで、自動記述を従来の研究とは違う角度から考察することはもとより、ブルトンの創作活動を総体的にとらえることが可能となる。彼の詩法の変遷がそれぞれの時期のブルトンの活動とどのような関係にあるかを丁寧に追うことで、ブルトンの本質的詩学を明らかにすることが本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究においては、ブルトンの詩法の変遷を時系列に沿って分析するため、必要な関連文献の網羅的収集およびその読解・分析を行うことが基本作業となる。その際に、同時期に書かれたブルトンの散文作品（レシ、批評、エッセー）も参照し、ブルトンの思想の変化

を総体的に把握し、その中で各時期の詩法がどう位置づけられるかを検証し、ブルトンの行動を支える詩学を総合的な見地から再検討した。研究で得られた成果は学会発表や雑誌論文への投稿、学術図書への執筆などを通して発表した。

４．研究成果

平成 28 年度の研究活動を通して明らかになったのは、ブルトンは 1930 年代に自動記述の探究を一時的に棚上げした、ということであった。彼は 1924 年の『宣言』において大々的に自動記述の称揚を行ったが、約 10 年後の 1933 年に「オートマティックなメッセージ」というテクストで自動記述の相対化を行うことになる。これはつまり、30 年代以降のブルトンの詩法は必ずしも自動記述に基づくものではないということである。このことを敢えて断言する研究はこれまでに例がなかったが、この視点を明確にすることには、ブルトンの詩学を解明する上で様々なメリットがある。たとえば、従来、ブルトンが『宣言』において自動記述の不動の理論を打ち立てたにもかかわらず、彼の手稿に書き直しの痕跡が見られるのは矛盾であり欺瞞である、という主張が、特にブルトンに批判的な言説においてなされることが多かったが、この批判は少なくとも 30 年代以降のブルトンの詩に関する限り、的外れなものであることが分かる。さらに、自動記述の相対化という視点を導入することで、この詩法の転換が起こる前後それぞれの時期のブルトンの詩法の変遷を、より正確に分析することができるようになる。1932 年に書かれた「A・ロラン・ド・ルネヴィルへの手紙」を参照すれば、『宣言』で提示された自動記述の理論は決して完成されたものではなく、20 年代を通してブルトンはその可能性を模索していたことは明らかであり、自動記述の内実を不動のものとみなす前述の批判は、この点においても有効性を失うことになるだろう。便宜的に 1919 年～1933 年までをブルトンの詩法変遷史の第一期、1933 年～1948 年を第二期と呼ぶことにすると、第一期は自動記述の可能性探究の時代にあたり、当初は段落形式に依拠したいわゆる散文詩作品が中心であったが、次第に詩句ごとに改行を行う自由詩作品の占める比重が大きくなる。これは、一つの始点から一つの終点へと単線的に進行する緊密な詩法が、詩句ごとに語り直しの可能性が導入され作品内に複数の始点を含み持つ開かれた詩法へと変化したということであり、結果的に自動記述の射程は大幅に拡大した。第二期においては、オートマティスムの新たな探究が行われる一方、現実空間に変更を加え強制的に現実を上書きしてしまう一種暴力的なブルトン独自の詩的描写の可能性も同時に模索されることになる。この詩的描写の可能性はまず、詩句と日用品とを組み合わせ新たな詩的現実を出現させるポエム＝オブジェ作品の制作を通じて実験的に試みられ、次第に描写対象の規模を広げることでその実効力を拡大したのだった。

平成 29 年度は、共著書『シュルレアリスムと抒情による蜂起』にブルトンの長編詩「三部会」の新訳を掲載し、同書掲載論文「線と糸との物語――アンドレ・ブルトンの『三部会』」ではその具体的な分析を行った。その結果、独自の言語操作を通して詩的言語を自由に展開し、結晶化した詩的イメージを通して思考を練り上げる詩人ブルトンの手法が浮き彫りになった。頭の中に先行するイメージを言葉で表現するのではなく、詩的イメージを通して思考するというブルトンの本質的な姿勢は、1930 年代から彼の実践するポエム=オブジェにおいて特に顕著であり、学会発表「潜在的現実の現働化――アンドレ・ブルトンにおけるポエム=オブジェの詩学」ではその詩学の射程の解明を試みた。詩的言語を通過させることで、物質の持つもうひとつの姿（潜在的現実）を出現させるポエム=オブジェの詩学は、40 年代以降には詩的言語を通過させることで現実世界を変容させる実践へとつながる。『秘法 17』などにも見られるこの一種の〈詩的描写〉は、30 年代半ばにブルトンの主張していたランボーとマルクスを一致させるという独自の世界変革理論を具体的に実践するものであった。『ナジャ』はしばしばブルトンの、あるいはシュルレアリスムの代表作として紹介されるが、以上のようなブルトンの独自性はまだ見られず、むしろキュビスムを含むモダニズムの影響の色濃い過渡的な作品と捕らえた方が、『ナジャ』の本質を正確に把握できるものと思われる。既存のブルトン像の再検討を迫るこの新たな視座を提示したのが研究集会発表「『キュビスム詩』の徴のもとに――アンドレ・ブルトン「ナジャ」の断片形式」であった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）

①<u>前之園望</u>「ブルトンの詩的描写とプロジェクションマッピング」『ユリイカ　ダダ・シュルレアリスムの 21 世紀』8 月臨時増刊号、青土社、2017 年、pp.270-279。

〔学会発表〕（計　2　件）

①<u>前之園望</u>「『キュビスム詩』の徴のもとに――アンドレ・ブルトン「ナジャ」の断片形式」、世界文学・語圏横断ネットワーク第 8 回研究集会パネル発表「響きあうモダニズム文学の諸相――汽水域としてのトリエステ、チューリヒ」での発表、立教大学、2018 年 3 月 31 日

②<u>前之園望</u>「潜在的現実の現働化――アンド

レ・ブルトンにおけるポエム=オブジェの詩学」、日本フランス語フランス文学会 2017 年度秋季大会、名古屋大学、2017 年 10 月 28 日

〔図書〕（計　2　件）
①松本完治〔編・著〕、前之園望、星埜守之、塚原史、エディション・イレーヌ、『シュルレアリスムと抒情による蜂起』、2017 年、232 ページ（アンドレ・ブルトン「物事を見抜く若き見者よ、次に語るのはあなただ……」前之園望〔訳〕pp.76-91、アンドレ・ブルトン「三部会」前之園望〔訳〕pp.92-117、前之園望「線と糸との物語――アンドレ・ブルトンの『三部会』」pp.118-140）。

②鈴木雅雄・塚本昌則〔編・著〕、伊藤亜紗、桑田光平、郷原佳以、合田陽祐、ウィリアム・マルクス、谷口亜沙子、塩塚秀一郎、たけだはるか、前之園望、野崎歓、熊木淳、門間広明、立花史、梶田裕、ジャクリーヌ・シェニウー＝ジャンドロン、橋本一径、新島進、中田健太郎、福田裕大、平凡社、『声と文学　拡張する身体の誘惑』、2017 年、590 ページ（前之園望「声は石になった」pp.232-255）。

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
特になし。

６．研究組織
(1)研究代表者
前之園　望（MAENOSONO Nozomu）
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：20784375

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）